



慶應義塾大学ビジネス・スクール

『踊る大捜査線』

1998年10月30日の午後から、有楽町マリオンの周囲は異様な熱気に包まれ始めた。小雨の中、午後5時の時点ですでに100人に達していた行列は、その後も人数が増え続け、終電車がなくなる午前0時までには2,500人、翌31日午前5時半の時点で3,200人に膨れ上がった。それは映画『踊る大捜査線THE MOVIE』の公開初日を待ちきれずに、全国各地から集まってきたこの映画のファンであった。東宝映画興行部の池田隆之は、97年の大ヒット映画『もののけ姫』の公開時に徹夜したファンが600人であったのに較べて、今回は劇場始まって以来の未曾有の事態であり、「なにかが起きる」という予感を感じていた¹。

様子を観に来たフジテレビ・プロデューサーの亀山千広は、あまりのファンの熱気に驚き、午前2時頃にドラマおよび映画製作に携わったスタッフを携帯電話で呼びだした。間もなくドラマ・映画の演出を担当した本広克行、脚本を担当した君塚良一をはじめ、撮影監督、美術スタッフなどが現場に顔を揃え、「徹夜組」のファンとともに数時間後に迫った映画公開への期待と興奮を分かち合いつつ夜を明かし始めた。

同じ頃、インターネット上の「踊る大捜査線オフィシャルWebサイト」には、徹夜で行列しているファンへの全国各地からの応援のメッセージと、実際に並んでいる現場からの実況報告のメッセージが刻々と書き込まれ、劇場周辺と同様の熱気に包まれていた。

東宝側では当初予定していた日劇東宝に加え、急遽日本劇場も開放し、主演俳優の舞台挨拶も3回に増やしたが、それでも当日の始発電車以降にやってきたファンは舞台挨拶を観ることはできなかった。東宝宣伝部の上田太地は、上映中の劇場内の様子を「コンサートか寄席のようなノリだった」、「あんなノリはこの仕事をして初めてだった」と述べた²。実際に映画の上映が終わった劇場内は、立ち上がって拍手をし、映画のエンディング・テーマを大声で合唱するファンで再び異様な熱気に包まれた。スクリーンの裏側で場内の様子をうかが

1 スカイパーフェクトTV Ch.118, 1999年5月8日15:00～9日1:00

2 同

このケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程における特別実習の成果としてまとめられたものであり、経営管理に関する適切あるいは不適切な処理を例示することを意図したものではない。ケース作成は慶應義塾大学大学院経営管理研究科 和田充夫教授の指導のもとに同研究科博士課程 澁谷 覚が行った。
(2000年1月作成)